

たまには馬鹿馬鹿しい話も悪くない
～閑話休題～

< 1 > タンピンってどんな食べ物？

先月一人で上野の寄席に出かけた日、湯島の歓楽街の一角にあるラーメン屋に入った。店のドアを開けて中に入ると、近頃流行りの「たどたどしい日本語」の店員が「イラシャイマセ～」。「オヒットリサマデショーカ～」、前後に人影もなく念を押す必要もない状態なのに……。意味もなく機械的に発せられる言葉の連発にムッとした気持ちを抑えつつ着席。「チュモンガキマッタラコエヲカケテクダサーイ」、一時置いて店員を呼び寄せて「タンメン」というと「タンピン?」、「ちがう、タンメン」、「タンピン?」、「タ・ン・メ・ン」、「タンメンノタンピンデスカ?」ようやく意味が通じた。

< 2 > 内紛の結末やいかに

父親である会長（大塚勝久氏）と社長である実の娘（大塚久美子氏）とが対立して、「親子の経営権争い」「会社経営を巡る父娘のバトル」として騒がれた大塚家具株式会社。あのような場面を公開しては企業イメージに影響がないはずがない。私にとってはどちらが正論かなど知りたいとも思わないことではあるが……。新聞などを見ると、その後もよからぬ情報ばかりが錯綜して業績不振を懸念する声も少なくない様子。ところが何と捨てる神あらば拾う神あり、投資家向け情報をのぞいてみたら、「大塚家具株、今が買い時!!」というタイトルの情報が発信されていた。「かぐやひめ天に昇る」ということなのか？

< 3 > ミサゴの捕食行動

オスプレイの墜落や不具合の事故が報告される度に大騒ぎになる。オスプレイは、アメリカのヘリコプター会社（ベル）と飛行機会社（ボーイング）が共同で開発したヘリコプターと飛行機を合体させた垂直離着陸可能な航空機。ヘリコプターと飛行機の長所を組み合わせ合わせた航空機を作ることで、「滑走路のいらぬ飛行機」「空中停止できる飛行機」「長時間飛行できるヘリコプター」などを実現させた「画期的な航空機」と言われていたのだが……。



そもそも「オスプレイ (Osprey)」とは、猛禽類の「ミサゴ」のことで漢字表記は「鶚」。海上上空で旋回・ホバリングをした後で急降下して魚を足で掴んで飛び去るというミサゴの捕食行動から、「墜落をイメージしたネーミング」と考えてしまうのは偏見だろうか。日本国民に認知されて、しかも不安感を払拭するためには、名前を変えた方が良いのではないかと思う。「オスプレイ」はもう止めて「メスプレイ」と改名すれば、皆安心するかもしれない。「もう落ち■こない」から。

< 4 > 横文字化・カタカナ化の弊害

昔は大きな集落や小さな町には必ずあったものだが、近頃はほとんど見かけなくなった「お米屋さん」。青地に白抜きの「塩」という看板や、赤い「たばこ」という看板を羽目板に貼り付けている店が多かった。旅に出ると列車の窓から地方都市の穏やかな風景を見るのが楽しみである。駅の脇にある小さなお店の、やや痛みが始まったような羽目板に「塩」「たばこ」の看板、その横に「仁丹」や「正露丸」を見るともう途中下車して散歩したくなる。そんなこんなで、とある田舎の駅で途中下車したことがある。こんな看板が目を引くような駅の駅前には殆どの場合閑散としている。人気（ひとけ）のない駅前通りをぶらついているとお米屋さんがあった。

やや変色気味のお店の看板には「林 米店」と書いてあった。

近頃何でも横文字化したりカタカナ化したりするのが流行る時代、このお店だけはこのままを続けて欲しいなどと思いながらお店の前を通り抜けた。「ハヤシライス」じゃちよいと締まらないから……

< 5 > そば屋で注文忘れるな

民進党の蓮舫代表が7月末に突如の退陣声明、幹事長も辞意を表している状態。8月21日告示、前原・枝野両氏が立候補して代表選挙がスタートし、投票日は9月1日というスケジュールが動き始めた。

駅前広場での演説などが報道されるが我々一般国民には投票権もあるわけでもなく意味がない。

森友・加計などを巡る問題に火を付けて騒ぎ立てていた民進党が、代表選挙をきっかけに一言も発しなくなってしまった。国会会期中から大きな問題として真剣に取り組んでいたようだが、「あれは何だったのか」というのが外野からの印象である。

そば屋に入って注文もせずに出て行ってしまったような、おかしな奴。(モリともカケとも言わずに)

民心から離れた民進党に将来はない。

< 6 > 八月は埼玉県の月

甲子園で埼玉県の高校が優勝した。「あ～あの学校はあの辺にある学校だったのか」と地図を見て再確認した人も少なくなかった。この日のニュースの画面に登場したいくつかのシーンの中に、「あまりポジティブな感じがしないいやな感じのシーン」があった。(と私は感じた)

マスコミの取材に答えている市民のセリフ、「もうダサイタマとは言わせない」。

そんなに卑屈・自虐の県民だったとは……。

8月のある暑い日、バラエティ演芸会を見に越谷へ行った時のこと。ギターを小脇にかかえた漫談が始まった。社会時評などを織り込んだユニークな自作の替え歌の連続はなかなかのものだった。

北山修の詩で有名になった「戦争を知らない子ども達」はこんな歌に……

「志ん生を知らずに 僕らは育った……志ん生を知らない子ども達よ～♪」

見事に出来上がった替え歌に感心していると、次は山本リンダが歌った「狙いうち」

「ウラワ・ウラワ・ウラウラワ……」と始まり

「東浦和に西浦和、南浦和に北浦和、武蔵浦和に中浦和、さいたまにゃ浦和が七つある ♪」

川崎市から参上したこの男、会場の埼玉県民をゆさぶるように笑わせて舞台を下りていった。

< 7 > 天気予報があたらぬ

「天気予報があたらぬ」という苦情は常に存在する。「天気予報がはずれた」と言われぬようにするために「確率何パーセント」というようなあやふやで意味不明な表現をするようになってからも何年にもなる。この間にも観測用の衛星はいくつも飛ばしたこどだし、金はもういくら注ぎ込んだかもわからないほど。より多くの情報を得られるようにしたところで、その情報を読み取って正しい判断をすることができなければ何も勝ちを生み出さないだけではなく混乱を招くことにもなる。「インターネット時代の人の生き方」として問題視されてきたこととも合致する。

おまけに天気予報の番組の中では、熱中症の対策・紫外線の注意・洗濯物の取り扱い・着るものの用意など本来の天気予報から逸脱した情報ばかりが増えているのが現状。

「予報」とは「事前に推測して知らせる」という意味で「予め知らせる」という文字の並びから「正確さ」を求められる。多角的に収集した情報を元にして「明日の天気の見当をつける」と言うことであれば「予想」の方がわかりやすい様な気がする。「予想」であれば外れてもある程度の逃げ場は確保出来ている。

もう「天気予報」はやめて「天気予想」にしたらどうか？競馬新聞のように、各気象予想会社が「天気予想」を発信し、より確度の高い情報を発信した会社が生き残れるという競争社会も悪くない。

以上